研究活動報告

体系的言語教育における広領域型研究と実践プロジェクトの活動

１．プロジェクトの前提

平成18～22年度の研究プロジェクト「言語コミュニケーション教育の研究と開発―大学・附属（小・中）の連携―」（以下「第一プロジェクト」と呼称する）の成果を踏まえ，平成23年度「言語文化教育の研究と実践―教育学部と附属学校（小・中）の連携―」（以下「第二プロジェクト」と呼称）での将来展望を経て，本プロジェクトは企画された。

島根大学教育学部の国語教育専修と英語教育専修との併合により，研究組織としての新講座「言語文化教育講座」が誕生したのに伴って，それに相応しい共同研究や研究交流を推進するために案出されたのが第一プロジェクトである。組織の改編に拠る「外側」からの動機によって始発したと言える。ただし，プロジェクトの主要な構成員が国語教育と英語教育の旧専修の教員だけでなく，附属学校（中学校と小学校）の国語科と英語科を担当する教員をも加えたことにより，実践的見地を包含する総合的な研究体制が確保できた点も軽視できず，改組に誘発されただけの所産ではなかった。

さて，こうして始動した第一プロジェクトは５年間継続し，平成20年度以降，主に「島根大学言語教育研究会」の研究発表会において研鑽され，国語と英語，大学と中学校と小学校，教科専門と教科教育と教育実践，という見地の相違を活かした討議・論議が累乗されて，共同研究プロジェクトの有効性が確認できるようになった。それらの成果の一部は，平成23年２月に『島根大学教育学部紀要』第44巻別冊特集号「言語コミュニケーション教育の研究と開発」の中に集成され，第一プロジェクトは一応の終結をみた。同時に，「教科内容学」への注目，教科専門と教科教育との連繋，新学習指導要領への対応，伝統的言語文化の尊重，外国語教育の小・中連動などの新たな研究目的が「内側」から見いだされ，共同研究プロジェクト自体の持続の必要性が確認された。

そこで，翌年度（23年度）は，同一構成員によって，言語文化教育の諸問題を大局的に捉える第二プロジェクトが新規に発想されて，今後の方向性が検討された。ここでも島根大学言語教育研究会の研究発表会が枢要な役割を果たした。そこで明らかになった研究課題が本プロジェクト創始の契機になったので，この一年限りの第二プロジェクトは，現行の第三のプロジェクトに直結する先蹤プロジェクトに位置づけてもよいであろう。

なお，平成18年度以降のすべての研究プロジェクトが島根大学教育学部の学部長裁量経費の支援対象となり，その概要は，同学部のホームページに公表している。

２．プロジェクトの大要

島根大学教育学部のミッション「教育的実践力（教師力）」養成の推進のために，本プロジェクトでは「教科及び教職に関する科目を有機的に結びつけた体系的な教育課程を充実させる」ことを主要目的とする。

構成員は，教育学部言語文化教育講座に所属する全研究者（10または11名），初等教育開発講座所属の言語教育関係の研究者（１名），附属中学校に在籍する国語科と英語科の研究者全員（６または７名）と附属小学校在籍の国語科の研究者全員（３または４名）から成る。

主な研究活動の形態は，共同研究と研究連携である。

３．プロジェクトの目的

言語教育関係の授業科目を有機的に連鎖させる体系的な教育課程を確保するために，広領域的視座に依拠した体系的言語教育の方法について探究することを目的とし，特に，以下の３点を重視する。

（１）新学習指導要領への対応
（２）教科教育学と教科内容学の連繋
（３）教育実践力育成方法の多角的探究

これらは第二プロジェクトからの継続であり，第一プロジェクトの活動経過から湧出したものである。

また，第一プロジェクトで重視した次の３視点は，本プロジェクトの目的達成に無縁ではないので，引き続き視野に入れる。

（ａ）教員養成専門学部の理念と目標に基づいて誕生した言語文化教育講座は，新しい教育的課題に積極的に取り組み，学部と附属学校の連携による言語コミュニケーション教育を創案・開発・実行することを責務とする。

（ｂ）研究組織としての新講座は，特性を生かした独自の研究体系を開発する必要がある。言語文化教育講座においては，英語・日本語の言語コミュニケーション能力を重視して広域的研究を進めている（教育・研究の実施体制，附属学校との連携，地域貢献などに関する中期目標・中期計画に照応している）。本プロジェクトはその一翼を担う。

（ｃ）学部・附属学校のより一層の連携を目指さなければならない（中期目標・中期計画に対応）。

以上の（１）（２）（３）は，社会の変化に即応し，新時代の学校教育のあり方に関わる性質のものであり，（ａ）（ｂ）（ｃ）は，教育学部・教育学研究科や教員養成系の課程の現実に根ざす傾向のもので，双方が相俟って「教育実践力（教師力）」）を効果的に育成できると思われる。

4．研 究 活 動

本プロジェクトの平成24年度から26年度前期までの主な研究活動は，以下の①～⑨である。ここには主旨のみを摘記するにとどめ，詳細は本誌掲載の各論説や巻末に付載した「島根大学言語教育研究会 研究発表会開催記録（活動記録）Ⅱ」に譲る。

① 学習指導要領を指針とした言語教育や言語文化教育の現代的課題の明確化とそれへの対応 ： 特に「伝統的言語文化の尊重」・「外国語教育(英語)教育と言語活動の充実」の実相に注目し，「言語活動に基づく思考力・判断力の育成」「教科横断的な問題解決能力や創造性の獲得」についても考察した。

② 言語文化教育の体系性の確立 ： 特に，言語文化に関係する教科教育学と教科内容学との関係性を探究し，両者の連携方法について検討した。

③ 言語教育専攻の基幹科目の意義についての考察 ： 専攻全体の必修科目である「言語コミュニケーション論」３科目（１年次後期）の実態を明らかにし，専攻の統一性について考察した。３科目名とそれぞれの担当者は以下のとおり。

「日英対照言語学」	縄田　裕幸
「日本語表現論」	百留　康晴
「異文化の交流と理解」	大谷みどり

④ 「内容構成研究」科目の教科内容学的照射 ： 教科内容学に関係する授業「内容構成研究」８科目のあり方の再検討を通じて，専門的学術と国語・英語・言語など学修との関係にも追迫した。８科目名とそれぞれの担当者は以下のとおり。

「文法教材研究」	百留　康晴
「日本現代文学教材研究」	田中　俊男
「日本古典文学教材研究」	福田　景道
「漢字・漢文教材研究」	竹田　健二
「書写教材研究」	福田　哲之
「英語科教材研究Ⅰ」	縄田　裕幸
「英語科教材研究Ⅱ」	林　　高宣
「英語科実践研究」	猫田　英伸

上の５科目は２年次後期開講，下の３科目は３年次前期開講で，基礎的な「言語コミュニケーション論」の後を受けつぐ応用的な側面ももつ。

⑤ 小学生から大学生までの言語教育の一貫性・相関性の検証 ： 附属学校の「幼-小-中」一貫教育構想等に対応して，日本語と英語の言語能力の相補・連動的学習方法を，特に小・中９年間を対象に研究開発した。附属学校での実習（学校教育実習Ⅰ～Ⅲなど）や体験学修を通じて，聞く・話す・読む・書くの４技能を総合的体系的に育成する指導にも注目した。さらに，大学生のコミュニケーション能力や文章表現力の育成方法を開発・実践する中で，小学校から大学までの言語教育の一貫性・相関性についても探査した。

⑥ 言語教育関係教材の整備と活用 ： 講座や専攻の新課題に対応するための資料を集積した（学部長裁量経費を主に使用した）。特に，中学校と高等学校の国語・英語・書写の全教科書を揃え，適宜活用することで，教科専門分野と教育実践分野との連係の確保に成功した。

⑦ 研究発表活動 ： 上の①～⑥を推進するのに，「島根大学言語教育研究会」の研究発表会が有効に機能していると考えられる。平成22年度までの第一プロジェクトの期間に10回，第二プロジェクトの期間にも３回を開催し，最後の第13回発表会において次のプロジェクトの方向性を示すに至った。それを受けて第三次の本プロジェクトの段階になり，研究発表会はさらに６回を重ねている。詳細な内容は本誌巻末の「島根大学言語教育研究会 研究発表会開催記録（活動記録）Ⅱ―第11～19回―」等に譲り，ここには第11回以降の開催日時・発表者・発表題目を列記しておく。そこに研究活動の要点が一望できると考えられるからである（第10回までについては平成22年刊の本『紀要』第44巻別冊特集号に載録済み）。

第11回　平成23年７月８日（金）
　高瀬彰典：ハーンの日本文化論
第12回　平成23年９月16日（金）
　竹田健二：漢文学習考―「漢文学基礎講義」の実践を通して―
第13回　平成24年３月23日（金）
　福田景道：言語教育研究と教科内容学―言語文化教育プロジェクトの方向性―
第14回　平成24年７月27日（金）
　田中俊男：国民教材としての魯迅「故郷」を考える
第15回　平成25年２月28日（木）
　福田景道：古文教材『竹取物語』の未来―専門教育科目「日本古典文学教材研究」をめぐって―
第16回　平成25年３月27日（水）
　田中耕司：国語科におけるデジタル教科書の活用
　※　「三土会」平成24年度研究発表会と合同開催
第17回　平成25年12月20日（金）
　竹田健二：国立台湾師範大学国語教学中心における中国語学習
第18回　平成26年１月31日（金）
　松本　舞：英詩と死
第19回　平成26年８月29日（金）
　百留康晴：専攻共通科目としての「日本語表現論」
　大谷みどり専攻共通科目としての「異文化の交流と理解」
　縄田裕幸：専攻共通科目としての「日英対照言語学」

⑧ プロジェクトの成果公表 ： 平成19年度以降，国語教育関係の教員によって，島根大学公開講座で国語

教育や国語教材に関する知見を公開し，本プロジェクトの成果の一部を反映させている。平成23年度以降の開催記録を以下に示す。

平成23年度：「国語」の世界を拓く（７日間）
平成24年度：「国語」の新境地（５日間）
平成25年度：「国語」の世界の新展開（７日間）
平成26年度：「国語」の世界を訪ねる（６日間）

この企画は一般社会人を主な対象とするので，本プロジェクトの中心的目的とは整合しない一面がある。しかし，教科専門分野の教員が，教科内容学見地をもって，「国語」という教科での学習を前提に講義を行う点では，「教科教育学と教科内容学の連繋」という課題に合致していると言ってよいであろう。

⑨ その他 ： 前回の特集号（第44巻別冊）では，現職教員を対象とする講習・講座等，他の研究組織との連携についても言及したが，今回は省略する。また，本プロジェクトの成果の一部は，各構成員によって，各種の学術文献や学術雑誌に公表されているが，そのすべてを省略する。繁多に過ぎるからである。

5．研 究 組 織

ここに報告するプロジェクトは，平成24年度以降のものであるが，先蹤的な性格をもつ平成23年度の第二プロジェクトの研究組織も併載する。

「言語文化教育の研究と実践」〈第二プロジェクト〉
【平成23年度】

氏　名	所　　属	専門分野
福田　景道	言語文化教育講座	日本文学
足立　悦男	言語文化教育講座	国語教育学
福田　哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田　健二	言語文化教育講座	漢文学
林　　高宣	言語文化教育講座	英語学
田中　俊男	言語文化教育講座	日本文学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
縄田　裕幸	言語文化教育講座	英語学
百留　康晴	言語文化教育講座	日本語学
猫田　英伸	言語文化教育講座	英語教育学
冨安　慎吾	初等教育開発講座	国語教育学
川井　史生	附　属　中　学　校	国語教育学
永野　信吾	附　属　中　学　校	国語教育学
籠橋　　剛	附　属　中　学　校	国語教育学
小澤　正則	附　属　中　学　校	英語教育学
高田　純子	附　属　中　学　校	英語教育学
須田　香織	附　属　中　学　校	英語教育学
岩﨑　香織	附　属　中　学　校	英語教育学
藤原　さり	附　属　小　学　校	国語教育学
中村　紀恵	附　属　小　学　校	国語教育学
喜多川昭博	附　属　小　学　校	国語教育学
恩田　一穂	附　属　小　学　校	国語教育学

「体系的言語教育における広領域型研究と実践」〈第三プロジェクト〉　平成24～26年度
【平成24年度】

氏　名	所　　属	専門分野
福田　景道	言語文化教育講座	日本文学
福田　哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田　健二	言語文化教育講座	漢文学
林　　高宣	言語文化教育講座	英語学
田中　俊男	言語文化教育講座	日本文学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
縄田　裕幸	言語文化教育講座	英語学
百留　康晴	言語文化教育講座	日本語学
猫田　英伸	言語文化教育講座	英語教育学
田中　耕司	言語文化教育講座	国語教育学
冨安　慎吾	初等教育開発講座	国語教育学
松 本　　舞	言語文化教育講座	英文学
川井　史生	附　属　中　学　校	国語教育学
永野　信吾	附　属　中　学　校	国語教育学
籠橋　　剛	附　属　中　学　校	国語教育学
高田　純子	附　属　中　学　校	英語教育学
須田　香織	附　属　中　学　校	英語教育学
岩﨑　香織	附　属　中　学　校	英語教育学
中村　紀恵	附　属　小　学　校	国語教育学
喜多川昭博	附　属　小　学　校	国語教育学
恩田　一穂	附　属　小　学　校	国語教育学

【平成25年度】

氏　名	所　　属	専門分野
福田　景道	言語文化教育講座	日本文学
福田　哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田　健二	言語文化教育講座	漢文学
林　　高宣	言語文化教育講座	英語学
田中　俊男	言語文化教育講座	日本文学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
縄田　裕幸	言語文化教育講座	英語学
百留　康晴	言語文化教育講座	日本語学
猫田　英伸	言語文化教育講座	英語教育学
田中　耕司	言語文化教育講座	国語教育学
冨安　慎吾	初等教育開発講座	国語教育学
松 本　　舞	言語文化教育講座	英文学
永野　信吾	附　属　中　学　校	国語教育学
籠橋　　剛	附　属　中　学　校	国語教育学
高田　純子	附　属　中　学　校	英語教育学
須田　香織	附　属　中　学　校	英語教育学
鳥屋尾慎人	附　属　中　学　校	国語教育学
和崎　公与	附　属　中　学　校	英語教育学
中村　紀恵	附　属　小　学　校	国語教育学
喜多川昭博	附　属　小　学　校	国語教育学
恩田　一穂	附　属　小　学　校	国語教育学

【平成26年度】

氏　名	所　　属	専門分野
福田　景道	言語文化教育講座	日本文学
福田　哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田　健二	言語文化教育講座	漢文学
林　　高宣	言語文化教育講座	英語学
縄田　裕幸	言語文化教育講座	英語学
田中　俊男	言語文化教育講座	日本文学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
百留　康晴	言語文化教育講座	日本語学
猫田　英伸	言語文化教育講座	英語教育学
田中　耕司	言語文化教育講座	国語教育学
冨安　慎吾	初等教育開発講座	国語教育学
松本　　舞	言語文化教育講座	英文学
永野　信吾	附属中学校	国語教育学
籠橋　　剛	附属中学校	国語教育学
高田　純子	附属中学校	英語教育学
須田　香織	附属中学校	英語教育学
鳥屋尾慎人	附属中学校	国語教育学
岩﨑　香織	附属中学校	英語教育学
中村　紀恵	附属小学校	国語教育学
喜多川昭博	附属小学校	国語教育学
恩田　一穂	附属小学校	国語教育学

6．本特集号について

3年間のプロジェクトによる研究成果の一端の報告として，本誌『島根大学教育学部紀要』第48巻別冊「体系的言語教育における広領域型研究と実践―教科内容研究と授業デザイン―」（Practical Studies toward the Establishment of Systematic Language Education）特集号を刊行することとした。プロジェクトや研究会の概要と以下の11編の研究論文・報告から成る。

1　福田景道：教員養成系学部における国語教育と英語教育の研究連係―広領域型言語文化教育研究の針路―，Cooperation between English Language Education and Japanese Language Education in the Teacher Training Faculty

2　高田純子・須田香織・岩崎香織・林高宣・縄田裕幸・猫田英伸・大谷みどり：附属学校と英語教育コース協働プロジェクトの成果と課題―附属中学校English Dayを通しての中学生と大学生の学び―，Achievement and Challenges of the Cooperative Project between the Junior High School Attached to Shimane University and the University's English Education Course―What Junior High School Students and University Students have Learned from "Fuzoku English Day"

3　冨安慎吾：国語教育のためのパターンランゲージについての考察―理念を実現するための形式の検討(1)―，A Study of Pattern Languages for Japanese Language Education

4　猫田英伸：コミュニケーションを支える文法力の育成―Processing Instruction(PI)に焦点を当てて―，Teaching Grammar for Communication：Focusing on Processing Instruction

5　田中耕司：学部学生における教育実習の指導方法に関する研究―国語科における模擬授業指導の検証を中心にして―，An Orientation Process for Undergraduate Students Prior to Practice Teaching：Management of a Trial Lesson in the Japanese Language

6　大谷みどり・飯島睦美・築道和明・小川巌：英語教育と特別支援教育の在り方への一考，A Thought to English Education with Supports from Special Needs Education

7　百留康晴：学生のレポート作成における現状と改善―専攻共通科目「日本語表現論」を出発点として―，The Current Situation and Problems of Report Writing Ability of Students With "Nihongo Hyogenron" as the Starting Point

8　福田景道：古典文学教材としての『竹取物語』―教科内容学からの授業デザイン―，"Taketori-Monogatari" as Classical Literary Texts：A View from the Study on Teaching Contents

9　縄田裕幸：「日英対照言語学」授業実践報告―言語観の変容を促す授業を目指して―，A Practical Report on "Comparative Studies in English and Japanese"：Toward the Development of Linguistic Awareness of Prospective Teachers

10　竹田健二：体験報告：国立台湾師範大学における中国語学習，A Report on My Experience of Studying Chinese in National Taiwan Normal University Mandarin Training Center

11　田中俊男：教科書・「赤い鳥」という場―新美南吉「ごんぎつね」論―，"Gongitsune" in the Japanese Textbook and "Akaitori"

言語教育という共通性を保ちつつ，多様な観点による多彩な論究が並ぶ。本プロジェクトの主旨に応じて，言語学・日本語学・日本文学・国語教育・英語教育・外国語教育・初等教育・中等教育・高等教育などからの広領域的なアプローチに基づいて教科教育学と教科内容学の連繋が志向されている。学習指導要領の新しい観点に即応し，教育実践力養成に関与する方向性も顕現している。これらの集結と連係の行き着くところに新時代の言語教育の体系化が成し遂げられると思われる。（福田景道）